

農林漁業体験に関するエビデンステーブル(研究結果の一覧)

番号	著者 (発行年)	調査国・ 地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	調査方法 研究デザイン/介入期 間	農林漁業体験の実施 方法/介入内容	調査項目 アウトカム指標 (利点、重要性に関する 調査項目)/評価方法	利点、重要性に関する 調査結果(関連)	結果 共変量の調整	キーワード
1	英 格,ら (2014)	福岡県	農村部の児童 体験学習実施 の小学3年生、 64人、体験学習 なしの小学3年 生、52人	前後比較デザイン (2012年9月～2013年3 月)	野菜作り体験授業の 実施(種まきから加工 食品(味噌や漬物な ど)を作るまで、一連の 作業)	日常行動、食習慣(8項 目)積極的肯定的回答の 得点が高くなるように5点 ～1点を与えた/質問紙 調査	日常行動や食習慣に関する項目のうち、 「食事について好き嫌いが無い」と「いつも 野菜を多めに食べたい」の2項目において、 体験の前後で点数が有意に高くなっていた (それぞれ $p<0.05$ 、 $p<0.01$ )。	調整なし	環境教育 農業体験 野菜作り体験 小学生 前後比較デザイン
2	佐藤 公子 (2015)	中国地方	大学生(看護系 大学)5学部1-4 年生、590人	横断研究	小学校から高校にお ける農業体験学習の 有無(思い出し法)	(1)食習慣7項目、(2)食知 識3項目/質問紙調査	食習慣については、農業体験学習の経験 がある群はない群と比べて、「夕食には主 食・主菜・副菜のそろった食事を食べる( $p=$ $0.048$ )」、「大学に畑・田んぼがあれば収穫 などの作業に参加してみたい( $p=0.009$ )」と 回答した者の割合が高かった。 食知識については、農業体験学習の経験 がある群はない群と比べて、「旬の野菜に ついて知っている( $p=0.007$ )」、「地産地消と いう言葉を知っている( $p=0.013$ )」、「青、赤、 緑、黄色の四群点数表を知っている ( $p=0.015$ )」と回答した者の割合が高かった。	調整なし	農業体験学習 食習慣 食知識 大学生 横断研究
3	室岡 順一 (2010)	大阪府 寝屋川市	小学1年生22人 (男女11名ずつ)	前後比較、対照を有し ない介入研究(2007年 度)	生活科等の時間にお いて、校内の農園など で実施(野菜類やさつ まいも等の作物につい て、植え付けから水や り、追肥、収穫までの 作業)	農業体験学習の結果、 児童に生じた作物や栽 培活動・関連する事象へ の興味・関心の変化(各 学期、給食、家庭の5区 分ごとに検討)/児童が1 年間の活動を振り返って 記述した作文と卒業文集 を基にテキストマイニン グの手法を用いて分析	[興味・関心の対象] <一学期> 1人当たり平均文字数:約100字 頻出単語数:8(「野菜」「育てる」「虫」「食 べる」など) <二学期> 1人当たり平均文字数:約250字 頻出単語数:20(「野菜」「育てる」「ミニキャ ロット」「二十日大根」など) <三学期> 1人当たり平均文字数:約125字 頻出単語数:5(「実」など) <給食・家庭> 1人当たり平均文字数:約250字 頻出単語数:給食12、家庭9(学期と異な るものが多く「ミニキャロット」「食べる」「おい しい」など) [興味・関心の内容] 二学期における興味・関心の広がり・深まり には、技能職員のアドバイスや農業者のハ ウスの見学、ビニールハウスの自作などの 展開が大きい。児童は野菜の収穫や他者 からの評価に期待して目標達成を実感。給 食と家庭には半数近くの児童が強い興味・ 関心を持っていた。	調整なし	農業体験学習 興味 関心 小学生 介入研究

番号	著者 (発行年)	調査国・ 地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	調査方法 研究デザイン/介入期 間	農林漁業体験の実施 方法/介入内容	調査項目 アウトカム指標 (利点、重要性に関する 調査項目)/評価方法	利点、重要性に関する 調査結果(関連)	結果 共変量の調整	キーワード
4	大浦 裕 二,ら (2009)	群馬県	4つの小学校の 5-6年生、524人	横断研究	(1)給食が自校方式か センター方式か (2)食農教育モデル校 指定の有無 (3)家庭の取り組み (家庭菜園と旅先での 農業体験の経験の有 無) (1)～(3)の違いによ る食農教育の影響を 検討	①食や農業に関する知 識 ②食に関わる普段の行 動 ③農業に対する意向 /質問紙調査	給食の調理方式の違いについては、自校 式給食の学校の児童の方が「給食で地元 野菜を利用していることを知っている」と回 答した者の割合が高かった。(p<0.001)。 ・食農教育モデル校指定の違いについて は、モデル校指定ありの児童の方が「給食 で地元野菜を利用していることを知っている 」と回答した割合が高く(p<0.01)、「サツマ イモの収穫時期」を正解した者の割合が高 かった(p=0.02)。「家族と食料品の買い物に 行く」「農業をしてみたい」という意向には統 計的有意差は認められなかった。 ・家庭菜園の経験がある児童は、家庭菜園 の経験がない児童よりも、地元野菜の利用 を知っており(p<0.00)、おきりこみを知って おり(p<0.00)、家族と買い物を(p<0.08)、 農業という仕事をしてみたい(p<0.02)と答え た者の割合が高かった。 ・農業体験を経験した児童は、農業体験を 経験していない児童より、おきりこみに対 する知識が高く(p<0.02)、家族と食料品の買 い物に行く(p<0.00)と答えた者の割合が高 かった。	調整なし	食農教育 学校給食 農業体験 食行動 小学生 横断研究
5	野田 知 子,ら (2003)	東京都 東京都島 嶼 宮城県 山形県 福島県 熊本県	13校の中学3年 生、1,334人	横断研究	生産体験(栽培体験、 飼育体験、解体体験、 魚をおろす体験など) の有無	①食べ物を大切にする 意識・行動 ②食べ物のいのちに対 する意識 /質問紙調査	・食べ物を大切にする意識・行動について、 「コンビニ弁当を賞味期限で捨てるのはもっ たいないと思うか」の問いに対し、「もったい ない」と答えた割合は、栽培体験がある者 が59.6%、ない者が53.2%であった。「落ちた リンゴを食べるか」の問いに対し、「食べる」 と答えた割合は、栽培体験のある者が 64.3%、栽培体験のない者が54.0%であ った。 ・食べ物のいのちに対する認識について、 「食べるとは他者のいのちを食べることであ ると思いますか」の問いに対し、「いつも思っ て感謝して食べている」と答えた割合は、魚 をおろす体験のある者が7.8%、魚をおろす 体験のない者は3.9%であった。 ・解体体験の自由記述結果より、「かわいそ う」「つらい」「やるせない」など感情的な意 識の記述がみられたが、単なる日常的な体 験でなく、学校等での意図的な学びと結び ついた体験がマイナスイメージだけでなく、 食べ物のいのちに対する認識を促す傾向 があることが示唆された。	調整なし	生産体験 食意識 食行動 中学生 横断研究

番号	著者 (発行年)	調査国・ 地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	調査方法 研究デザイン/介入期 間	農林漁業体験の実施 方法/介入内容	調査項目 アウトカム指標 (利点、重要性に関する 調査項目)/評価方法	利点、重要性に関する 調査結果(関連)	結果 共変量の調整	キーワード
6	林 伸子, ら (2002)	福岡県	幼稚園5歳児、 17人(男児8人、 女児9人)	前後比較デザイン (2002年5月～10月)	保育活動時間におけ る4回の食材体験活動 /4種類の食材との出 会い、体験活動	・日常の食事によく利用 される野菜29品目の嗜 好の変化/質問紙調査 ・お弁当の野菜の嗜好性 /観察法	・野菜類に対する嗜好の変化をみとこところ、 体験後には、男児は8名中4名がプラスの嗜 好性を、残りの4名がマイナスの嗜好性を示 し、女児は9名中9名全員がプラスの嗜好性 を示した。 ・実践活動が進むにつれ、多くの子供たち のお弁当の中の野菜の数が増えていき、教 材として活用した野菜が弁当に入っている 子どもが毎日2-3名いた。お弁当に入っ ている野菜は全員の子どもが食べられるよ うになり、嫌いで食べない食品を残す行為は みられなくなった。	調整なし	食材体験 野菜摂取 野菜の嗜好性 幼児 前後比較デザイン
7	嶋谷 円, ら (2008)	滋賀県	小学1-3年の児 童および兄弟18 人とその保護者 13人	前後比較、対照を有し ない介入研究(2002～ 2006年度)	野菜栽培(種まきから 収穫までの作業)	食への関心/体験中の観 察、作文の内容分析、質 問紙調査(2006年度の み)	・児童は、野菜の成長の様子や実の付き 方、種のでき方を興味深く観察し、生育不良 や枯死に対し残念な気持ちを作文に残して いた。また、キャベツについた青虫から、い のちについての話し合いの場を持ち、生命 について考える機会があった。野菜嫌いの 子どもが多いが、自分が育てた野菜は特別 な感情を持って食していた。 ・保護者は、親子で共に働いて収穫した野 菜を料理し、食することにより喜びを共有し たり、共通の話題が持てる利点があった。 ・2006年度の質問紙調査では、回答者の 80%以上が「食事の際に野菜の鮮度や季 節の野菜を意識するようになった」と回答 し、また、回答の60%以上が「活動の中で子 どもたちに伝えたいと感じたこと」について 「自然の大切さ、すばらしさなど自然に関し て」と回答した。	調整なし	農業体験 食への関心 小学生 保護者

番号	著者 (発行年)	調査国・ 地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	調査方法 研究デザイン/介入期 間	農林漁業体験の実施 方法/介入内容	調査項目 アウトカム指標 (利点、重要性に関する 調査項目)/評価方法	利点、重要性に関する 調査結果(関連)	結果 共変量の調整	キーワード
8	山田 伊澄 (2008)	東京都(江 戸川区・渋 谷区・武蔵 野市)	3つの小学校の5 年生、178人	横断研究	(1)学校内 (2)郊外(日帰り) (3)農村(宿泊) (1)~(3)の農業体験 学習の実施場所の違 いによる影響を検討	子どもの意識・情感 ①自然・生き物を大切に する気持ち ②自然・生き物への観察 力・科学的知識 ③食べ物を大切にす る気持ち ④農業農村への知識・理 解 ⑤就農への志向 ⑥農村定住への志向 ⑦協働・協力の気持ち ⑧心の安定 ⑨積極性・自主性 /質問紙調査	農業体験学習の実施場所により、子供の意 識・情感への影響が異なることが明らかとな り、「自然・生き物への観察力・科学的知 識」、「農業・農村への知識・理解等」に対し ては、「郊外」がプラスの影響をおよぼし、 「農村定住への志向」「心の安定等」に対し ては、「農村」がプラスの影響を及ぼし、「積 極性・自主性等」では「学校内」がプラスに 影響する傾向になっていた。	調整なし	農業体験学習 自然や農業への 意識・情感 小学生 観察研究
9	菅野 靖 子,ら (2011)	新潟県 新潟市	幼稚園4歳児、 38人、その保護 者25人	前後比較デザイン (2010年5月-7月)	野菜栽培体験(なすの 栽培、収穫、調理、摂 取)	①栽培体験前後の給食 の野菜摂取量 (1)なすの副菜2種類 (2)なす以外の副菜2種 類 /残食量調査 ②野菜についての好き嫌 い /質問紙調査	[給食の野菜摂取量調査] なすの味噌炒め( $p=0.001$ )、なすのカレー炒 め( $p<0.001$ )ともに、体験事前に比べて事後 で摂取量が有意に多かった。 副菜は、事前のもやし中華やえと、事後の 含め煮では有意差はみられず、( $p=0.550$ )、 事前のひじき入りサラダと事後のおきざみ 昆布の炒め煮では、事後で摂取量が有意 に多かった( $p<0.001$ )。 [質問紙調査] 家庭でなす料理が出されたときに「食べる」 割合は、事前と事後で有意差はみられな かった( $p=0.525$ )。	調整なし	野菜栽培体験 野菜摂取量 幼稚園児 前後比較デザイン

番号	著者 (発行年)	調査国・ 地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	調査方法 研究デザイン/介入期 間	農林漁業体験の実施 方法/介入内容	調査項目 アウトカム指標 (利点、重要性に関する 調査項目)/評価方法	利点、重要性に関する 調査結果(関連)	結果 共変量の調整	キーワード
10	佐藤 幸子, ら(2009)	東京都	栄養士を目指す 短期大学生	前後比較デザイン (2008年度)	①文献調査 ②市場調査 ③食農教育(ハーブの 種まき、収穫・加工調 製) ④調理実習	食意識	文献調査により和食で食していた香味野菜もハーブと理解し、ハーブが身近な食材と再認識し、市場調査によりハーブが多くの商品に活用できる食材であることを確認できた。 また、ハーブ栽培からハーブは身近な食材となった。 調理実習からレシピを作成するとき、調理に対して真剣な姿勢で臨み、美味しさを追求する食意識の向上が認められた。 食農体験実習から、農作物を栽培する姿勢を学び、ハーブの生長過程から収穫・消費までの食材としての食のつながりを理解し、さらに食べ残しが腐葉土になって食材が土となり、その土から食物がまた生長するという食物の循環を理解できた。 ハーブ栽培のフードサイクルは、食育の推進に求められているPDCAサイクルを食農体験を通して実施できる食育カリキュラムであると推察された。	調整なし	食農教育 ハーブ栽培 食意識 大学生 前後比較デザイン
11	谷口 貴穂, ら (2010)	福島県 A市 埼玉県 B市	小学5年生、361 人男子(福島県A 市57人、埼玉県 B市120人)、女 子(福島県A市63 人、埼玉県B市 121人)	横断研究	農作業体験および農 作業体験に関する認 知的要因の地域差比 較	①主観的農業体験 ②野菜を食べる頻度 ③農作業体験の認知的 要因 (1)食に対する感謝の 気持ち (2)地場産物に対する 態度 (3)農業の知識 (4)農業への態度 /質問紙調査	・主観的農作業体験の得点の比較では、福島県A市の方が、埼玉県B市よりも有意に得点が高かった。(p<0.001)。野菜を食べる頻度の得点の比較では、埼玉県B市の児童の方が、野菜を食べる頻度の得点が有意に高かった(p<0.01)。 ・主観的農作業体験と認知的要因との関連の検討では、福島県の児童は埼玉県の児童より、主観的農作業体験と地場産物に対する態度(p<0.01)、農業の知識(p<0.01)の相関係数が高く、野菜を食べる頻度と食に対する感謝の気持ち(p<0.01)、地場産物に対する態度(p<0.01)、農業への知識(p<0.01)の相関係数が高かった。	調整なし	農作業体験 認知的要因 地域差 小学生

番号	著者 (発行年)	調査国・ 地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	調査方法 研究デザイン/介入期 間	農林漁業体験の実施 方法/介入内容	調査項目 アウトカム指標 (利点、重要性に関する 調査項目)/評価方法	利点、重要性に関する 調査結果(関連)	結果 共変量の調整	キーワード
12	Yoshida T, et al.(2007)	静岡県 浜松市	隣接する2つの 小学校の小学1 年生130人(A校 67人, B校63人)	対照を有する介入研 究(2000年-2002年)	A校(介入群)の食育プ ログラム(1年生時4月 ~3年生時4月まで) ①料理の選択(バランス のとれた食事選択) ②味覚に関する議論 (①で選択した料理に 関する質疑応答) ③調理体験(食事と食 材の関係を学ぶ) ④農業体験(食材の成 長過程を理解する) ⑤便の観察	①身体測定変数 身長、体重 ②味覚感受性 「甘い」「塩辛い」「酸っぱ い」「苦い」「4つの味覚の 合計」	A校(介入群)とB校(対照群)で介入の前後 の味覚の変化について比較すると、A校の 児童において酸味(p<0.05)、苦み(p<0.05)、 味覚の合計(P<0.05)で感受性の有意な上 昇がみられた。	調整なし	農業体験 味覚 小学生 介入研究